

生徒の相互理解を進める手立てとしての学級通信の可能性：  
個を結び、一体感のある学級づくりをめざして

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2015-05-14 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 吉岡, 三智子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.14945/00008472">https://doi.org/10.14945/00008472</a>

# 生徒の相互理解を進める手立てとしての学級通信の可能性

～個を結び、一体感のある学級づくりをめざして～

吉岡 三智子

Exploring the Effectiveness of the Classroom Newsletter as  
a Method for Enhancing

Mutual Understanding among Students in Junior High School

Michiko YOSHIOKA

## 1 問題の所在と研究の目的

私たち教職員は、変化が激しい社会の影響を受けながら日々成長している生徒とともに学校生活を送っている。担任として学級にいれば、「学級」をどのようにまとめていくか、その中で生徒の成長をどのように助けていくことが必要なのか、どのようにすることで一人ひとりの可能性を導き出すことができるかなど、学級経営や生徒指導について悩みを抱えない時間はない。

中央教育審議会(2006)は「今後の教員養成・免許制度の在り方について(答申)」の中で、教師として最低限必要な資質能力を確実に養成するため、教職課程の必修科目として「教職実践演習」を新たに設置するよう求めた。どのような「学級経営」を行ないどのような「学級集団」をつくっていくか、それは教育問題の改善状況にも影響を与える重要なことである。

思春期を迎えている中学生は、周囲から自分がどのように見られているかを気にするとともに、周囲の生徒がどのようなことを思い考えているのかについての関心を強める。自分一人が周囲の生徒と違うことに関しておそれを感じたり不安に思ったりする。中学生にとって級友(友だち)との人間関係をいかに良好に保って生活するかはとても重要なことである。「嫌われる」ことをおそれるがあまりそのままの自分をなかなか出すことができない傾向が強く、そのことに窮屈さを感じながら生活しているのが現実だろう。とするならば、ごく自然でいられる場所、自分らしくいられる場所をつくるのが、生徒の「よりよい成長」にとって非常に重要ではないかと考えるのである。しかし、その場所となりうるのは学校だけとは限らない。ただ、一日の生活の中で大半を過ごしている学校生活、さらにはその中で多くの時間を過ごす「学級生活」の場所をそのような環境にすることが、より好ましいのではないかと思われる。

そこで、生徒にとって学級を自分らしくいられる場所にするためには、生徒個人の思いや考えを共有する手立てを提供することが有効なのではないかと考える。それにより、生徒は周囲の生徒に対する理解を深めたり、新たな自分づくりを進めたりしながら、仲間との結びつきを強くし学級の中で安心して生活できるようになるのではないかと考えられるからである。先述した中学生の人間関係の特徴や筆者の教師経験を踏まえるならば、互いの思いを交流させることを生徒自身に任せていてもうまくいかないことが予想され、担任からの支援が必要とされる。学級内の生徒同士のメッセージを交流させるための手だてとして日常的かつ継続的に教師が行っていくことができ、発達段階における自己表現の困難さも考慮した方法の一つとして「学級通信」を取り上げることとする。

本研究は、「学級通信」が学級の生徒の相互理解を進め、一体感のある学級をつくる手だてとな

ることを仮説とし、実習校の T 教諭が発行する「学級通信」が実際に学級経営の「どこに、どのような効果をもたらすのか」「生徒の相互理解の『手段』として学級にどのような状況をつくり出しているのか」を明らかにし、それをもとに「学級通信」が持つ新たな可能性を見出すことを目的とする。

## 2 研究の方法

実習校である S 市立 N 中学校、2 年 1 組（男子 17 名、女子 13 名、計 30 名）と担任 T 教諭（教職経験 19 年目、保健体育担当、生徒指導主事、40 代女性）を対象に研究を行うこととする。

5,7,11 月に生徒を対象にした「学級通信」についての質問紙調査、5 月に教職員を対象にした質問紙調査を行なった(アクションリサーチ I)。また、4 月の実習日から 11 月末の実習日に授業を中心とした参与観察を始め、それと同時に「生活ノート」分析を継続した(アクションリサーチ II)。6 月には「学級通信」への介入として「感想ノート」を導入し、下旬からそのフィードバックを始めた。夏休みには生徒と個人面接をし、「生活ノート」や「学級通信」に対する思いを探った(アクションリサーチ III)。なお、対象学級生徒の自尊感情の変化について考察するため 5,11 月に自尊感情に関する質問紙調査を行なった。そのほか参与観察と合わせて T 教諭や対象学級生徒に対する聞き取り調査を行なった(アクションリサーチ IV)。

## 3 アクションリサーチ I：教職員及び生徒の「学級通信」に対する意識の現状

これまでに出された「学級通信」に関わる資料や先行研究の読み取りと、筆者が作成した「学級通信に関する質問紙調査」を行ない、現場の教職員の「学級通信」に関わる意識の現状を探ったところ、教職員は実践経験も含めて「学級通信」に関しての意識は高いことが示され、「期待できること」や実際に感じる事ができた「効果」として、多くの教職員が「生徒同士の「共感」的態度を持たせたり「相互理解」をしたりすることができる」「発行している教師自身も生徒との共感的理解を得られたり、自分の思いや考えが生徒や保護者に伝わることを感じたりすることによって、発行することの喜びや楽しさを味わうことができる」と回答していた。しかしその一方で、「時間」に関わる発行の困難さを強く感じていることも示された。また、教師は「学級通信」に対して「教師自身の思いや考えを伝える」ことや「良さ」に対する気づきへの期待が大きく、「生徒同士の結びつき」を強めたり「生徒個人」の気づきを強めたりすることに対しての期待は小さい傾向にあることも見出された。

同様に、生徒を対象に「学級通信についての質問紙調査」を行なった。その結果から、生徒は「学級通信」に対する「特別」な意識はなく、級友と話題にしたり保護者に見せて話題にしたりすることもあまりないことが示された。また、「良さ」に対する気づきよりも「悪さ」に対する気づきが大きいこと、「他の人の考えや思い、大切にしていることを認めること」や「担任の先生の思いや考え」がわかると捉える傾向が強く表れていた。しかし、「学級通信について思うこと」の自由記述からは「みんなの気持ち」や「みんなの生活」など、「みんな」という言葉が多くみられ、生徒の「学級通信」に対する関心は「担任の思いや考え」に対することよりも「級友に対する理解」に対することへのほうが高い傾向が強いのではないかと解釈された。

この両者への質問紙調査と聞き取り調査から、教師と生徒とは「学級通信」に対する思い（期待・関心事）や扱いについての相違が見られることが明らかにされた。

## 4 アクションリサーチⅡ：参与観察を通して見た対象学級担任及び生徒の実態

### (1) T教諭の「学級通信」の特徴

#### ①学級通信の構成と発行頻度

「学級通信」は生徒の生活ノートの記録をそのままコピーしたものを材料とし、提出した生徒分すべてを掲載する。ただし、学級通信への掲載は生徒の意思に任されている。T教諭は学級通信に掲載する生徒の日記全体を通して、その日に伝えたいことを書き込んでいる。生徒個人の内容一つひとつに対するコメントは入れない。要は「教師（T教諭自身・おとな）の勝手な価値づけ、意味づけをしない」ということである。したがって、生徒の日記の内容と学級通信に書く教諭のコメントとがあまり一致していない場合もある。そのような学級通信を毎日発行している。

#### ②生活ノートの内容と提出

生活ノートは生徒が自由に書けるものとなっている（教諭が生徒に考えさせたいことや書かせたいことがあるときのみ、テーマを設定する）。基本的に、生徒は自分が書きたいと思ったときに書きたいことを書き、提出したい日に提出する。また、自分が好きな（描きたい）絵やイラストを描いたりする生徒、逆に何も書いていないまま提出する生徒もいたりする。それについても認めている。T教諭は生活ノートの内容についても提出についても強制をしていない。

#### ③生活ノートへの担任の反応と指導

T教諭は提出された日記に「人として」の「自己開示」をしている（日記以外の場面でも「教師」「担任」という立場ではなく「人」として生徒と対等に関わり合う姿が多くみられる）。生徒の日記に対してその時自分が思ったことをその通りにコメントしている。特別丁寧な言葉でもなく、生徒に話しかけているようなT教諭らしさが表れた言葉で返事を書いている。生徒がどのような内容で書いてこようとも、たとえそこに文章がなく絵だけで終わっていても、さらには、何も書かないで提出したとしても、T教諭はそれを全面的に受け止めて、それを書いた（書かなかったけれど提出した）生徒の状況や心境を思いながらコメントをしていると思われる。生徒の思いを共感的に受け止めながらも、時に厳しい言葉を返すこともある。また、記載内容から気になる生徒については、給食、昼休み、帰りの会、清掃時間、放課後など、あらゆる時間に観察し、声をかけている。

#### ④配布と読ませ方

発行した「学級通信」は帰りの会で一人一枚ずつ配布する。読むための時間は設けていない。統一したファイルなども用意していない。一枚は学級掲示とする。

### (2) T教諭の「学級通信」スタイルが生徒（学級）に与えていると考えられる影響

#### ①生徒の「自由」を保障している

書きたいときに書きたいことを何でも書け、書きたいと思わないとき、伝えたいことがないとき、書こうと思うことが思いつかないときなどは書かないでいられる。また、伝えたい相手を担任のみに限定する時を選ぶことができる。

「学級通信」は読みたいときに読みたいように読めるものになっている。配布された「学級通信」はときにロッカーの中や机の中に置きっぱなしになっていたり、クシャクシャになっていた様子もあった。教室に落ちていたりそれを踏んだ跡が見られたりすることもあったが、T教諭は、他の配布物と同じように指導し、「学級通信」を特別なものとして扱うことはなかった。

## ②生徒の「本音」が詰まっている

「ダメな自分」「書けない（書かない自分）」「趣味のことが頭から離れない自分」など、通常マイナス的に捉えられやすい自分…他の級友とは違う自分の姿を自由に書くことができる。

## ③コミュニケーションツールになっている

「生活ノート」が書きたいときに書きたいことを何でも書ける担任との交換ノートになっている。さらに「学級通信」が担任や級友に伝えたい思いを伝えられる伝達ツールになっている。

## ④「自尊感情」の高まりにつながっている

ここでは「自尊感情」は「自分」を「尊敬する」「良いものとして捉える」ということだけではなく「できない」ことがある自分も「自分」として「受け入れる」と定義していることから、①から③は生徒の「自尊感情」の高まりを助けている。

## ⑤「自己指導力（自発性・自律性・自主性）」の育成

対象学級には「自由で安全な雰囲気、外からの圧力が最小限にとどめられること」が実現しやすい状況があると推測され、T 教諭が「自身の自己受容の態度」を持ち「子どもをあるがままに受け入れる態度を一貫して持つこと」に努めていることから生徒の「自己受容と自己理解」を促すことができるのではないかと考えられる。また、参与観察からの生徒の様子には「欲求や情緒が自然のままにあらわれ、直接的には外部的な行動として表現される」場面がすでにあり、T 教諭の「学級通信」によって「教師と児童生徒が相互に人間として無条件に尊重し合う態度でありのままに自分を語り、共感的に理解し合う人間関係を育てること」が実現していると推測される。以上のことから、T 教諭の指導の態度を含め、T 教諭が毎日発行している「学級通信」は自己指導力を育て得る効果を持っている可能性が高いのではないかと考えられた。

## 5 アクションリサーチⅢ：「感想ノート」の導入と「フィードバック」の効果

「感想ノート」導入の目的は、生徒が「学級通信」の内容に目を向けて、T 教諭が伝えようとしていることや友達の思いや考えをどのように受け止めたかを探るためであった。しかし、この「感想ノート」導入の結果、その日の「学級通信」の内容とは全く違うことの記載（自分の思っていることや絵、個人的な趣味のことなど）もよく見られたことから、生徒はそれぞれに「学級通信」の中から自分がその時必要だと思ったことだけを自然に（無意識的に）自分の中に取り込んで、書かれている内容の全てを「自分事」として受け止めているわけではないことが明らかにされた。その時の自分にとって受け止めようとする内容がなかったときは記憶にとどめるほどの自分自身への内容の取り込みはない。また、「感想ノート」のフィードバックについては、当初は「学級通信に対する積極的な関わり」が示されることが予想されたものの「質問紙調査」の自由記述の内容の分析から「コメント者（筆者）との間の個人的なやり取りに関心がある」という結果となった。5 月と比較しても「学級通信」自体に対する積極的・好意的関わりが増したとは考えられなかった。しかしながら、コメント者が「感想ノート」を通して生徒が書いた内容に対する率直な思いを返すことによって、相互の結びつきが強くなり、両者の間に信頼関係が生まれる（深まる）のではないかと考えられた。

## 6 アクションリサーチⅣ：質問紙調査結果から分析する対象学級生徒の変容

「学級通信」についての質問紙調査 30 項目を対象に、5 月から 11 月の計 3 回のデータをまとめて主因子法による因子分析を行なった結果、固有値の減衰状況を考慮して①関係性と自己向上



②通信への肯定的関心③通信への批判的態度④自己への気づきの4つの因子が抽出された。この調査の結果から T 教諭が発行する「学級通信」は、学級生徒に周囲と自身との関係をつかませ、その中での自己の在り方や、自身のありようを考え直す（向上させようとする）契機を与えていることの効果が高いことがわかった。

「自尊感情」についての質問紙調査の結果について質問項目ごとに回答の平均値を算出し、5月11月の比較を行なったが大きな変化は見られなかった。しかし、「学級通信」質問紙調査から得られた4つの因子と「自尊感情」についての質問紙調査の結果の相関関係を見てみると(Table1)、5月当初は③（学級通信に対する批判的態度）が強いと④（自分自身に対する気づき）が起こりにくかったが、7・11月になると③であったとしても④が可能となっていることが示された。すなわち、年度当初(5月)の調査で自尊感情が低かった生徒は11月になると③（学級通信に対する批判的な態度）は弱まったと考えられる。また、5月当初③（学級通信に対する批判的態度）が強かった生徒は、11月になると自尊感情尺度のB（関係の中での自己）、C（自己主張・自己決定）にプラスの変化（特にCはBよりも強い変化）が見られると考えられる。これは、5月当初、学級通信に対する批判的な態度が強かった生徒の一部が11月になると自己主張や自己決定をすることができるようになったためであることを意味する。年度当初は学級内で自己を表出することがなかなかできなかった生徒も、次第にそれができるようになっているというような変化が生徒の中に生じていたのかもしれない。「自尊感情」の高低に関わらず、多くの生徒（T教諭の学級）に「学級通信」が根付いた（日常化し、生徒に受け入れられた）可能性を指摘することができる。

Table1 5月と11月における学級通信への態度と自尊感情の相関係数

		①関係性と自己向上	②通信への肯定的関心	③通信への批判的態度	④自分への気づき
5月	A 自己評価・自己受容	.191	.321	-.456*	.177
	B 関係の中での自己	.575**	.568**	-.634***	.390*
	C 自己主張・自己決定	.029	.203	-.406*	.392*
11月	A 自己評価・自己受容	.126	.332	-.315	.144
	B 関係の中での自己	.628***	.471**	-.314	.291
	C 自己主張・自己決定	.308	.162	-.084	.188

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$ , \*\*\*  $p < .001$

「学級通信」についての記述からは、「学級通信」に対して肯定的・好意的な態度の生徒ばかりではなく、否定的に捉え消極的な態度である生徒もいることが確かめられた。また、半数以上の生徒が「学級通信」を「みんなのことを知る」ために活用して「なくなってしまうと何だか物足りなく」「さみしい」と思っていることが明らかとなった。また、その反面「担任の思いや考えを知る」ことに気持ちを向けている生徒は少ないことが推測された。

## 7 総合考察：対象学級生徒及び担任にとっての「学級通信」

対象学級生徒及びT教諭にとって、T教諭が発行する「学級通信」の意義（効果）やこれからの可能性については以下のように考えられるであろう。

### ①生徒に「安心感を与える空間（場）」を生み出している

多くの生徒が学級は今、何を目指して生活しているのか、担任や級友がどんなことを思っているのかを知ったり、自分のことを知ってもらったりするために「学級通信」を使っていると考えられた。それは互いの思いをつなぐ道具になり、友人関係づくりにも活用していることが推測された。また、T教諭のように、「同じ学級通信スタイル（掲載内容や方法に変化をつけない）」で

「毎日発行する」ことによって、「学級通信」が常に「自分自身」を表出できる場として「保障」されているとともに、仲間やT教諭の思いや考えを知る情報源として「保障」されている。それは「安心の保障」である。特に、発信については「匿名性」もあるため、さらに「安心感」は増すと考えられる。

## ②生徒の「主体性」を育てている

生徒が自分の言いたいことを言い、やりたいことをやっている姿は一見、とても自己中心的で身勝手な態度であり、そのような生徒が多くみられる学級は担任の学級経営に問題があると思いがちである。しかし、そこに学級内の「一定のきまり」があり、学級内で共通理解されているのであれば、一見すると自己中心的な生徒の言動は、実際には生徒が自分らしい姿を表出している、いわば生徒が「安心感」の中で主体的に行動している表れであると解釈することができる。

## ③担任に「安心感」を生み出している

担任に行なったインタビュー調査からは、T教諭自身が「学級通信」を介して生徒との理解が深まることへの期待を強く持っていることが示された。「学級通信」に関する「質問紙調査」の回答ではT教諭は「学級通信」が「絶対的なものではない」という意識を持ち、「学級通信」を全面的に頼りにしているわけではない。とはいえ、T教諭もやはり「生徒とのつながりを自身の中で感じられる」ようになり、「きっとわかり合え(てい)るんだ」という「安心」を得るためにも発行していると推測された。

### 筆者の学級通信観の変容

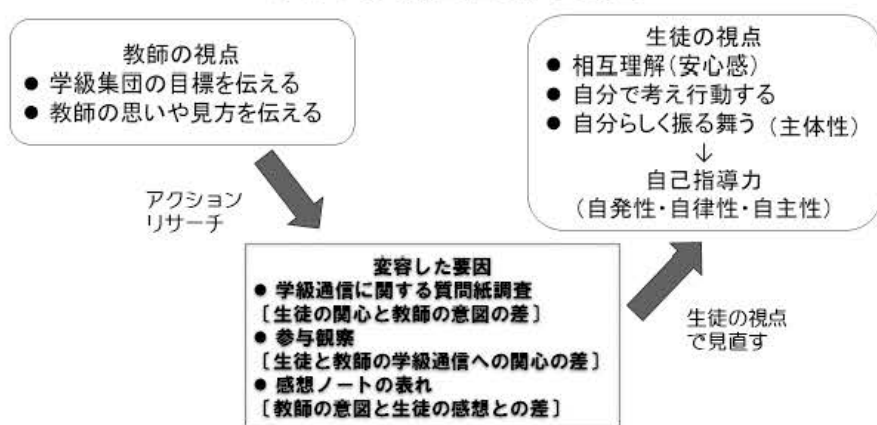


FIGURE 1 筆者の学級通信観の変容

今回筆者が注目した「学級通信」は、「学級経営」のほんの一部であって、すべてではない。効果を感じる場合も感じない場合もあるだろう。教師によって、その時の学級によってもその状況は違ってくるだろう。しかし、「学級通信」に関してこれまで言わ

れてきている効果も含めて、学級生徒に「安心感」を持たせ、そのことが学級の「一体感」を生むことにつながっていく可能性があることが示唆された(FIGURE1)。

思春期の生徒は友人関係を最優先に考える傾向が強くなるため、友人の思いに敏感になる。相手によってまたはその場面によって自分の行動に変化をつけることはこの時期の子どもにとっては当たり前の姿であり、そのように気を遣いながらの生活は大変疲れるはずである。でも、それもまた思春期という成長段階においては自然なことである。よって、苦しい思いをしていることを知っている教師(おとな)は生徒(子ども)が安心して過ごせる環境作りの一つとして級友の思いが分かるツールを提供すること、そして本人自身が本当の自分を安心して出せる場を提供することが重要なことであると言えよう。その一つとして「学級通信」は有効であると考えられる。